

石川捷治・中村尚樹著『スペイン市民戦争とアジア —遙かなる自由と理想のために—』

熊野, 直樹
九州大学大学院法学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/16453>

出版情報：政治研究. 54, pp.175-176, 2007-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

じて警戒に接したものととして悲しみに堪えない。衷心より哀悼の意を表したい。

(伊藤洋典)

石川捷治・中村尚樹著

『スペイン市民戦争とアジア——遙かなる自由と理想のために——へ九大アジア叢書6』

(九州大学出版会、二〇〇六年、一六七頁)

本書は、「スペイン市民戦争」とアジアとの関連を現代的な視点から、再検討した著書である。構成は、研究者(石川捷治)による章とジャーナリスト(中村尚樹)による章からなり、プロローグ「今なぜスペイン市民戦争か」において、スペイン「内戦」を「市民戦争」と敢えて呼ぶ理由とそれがアジアという視点からみた場合「現代の内戦」の起点となることが説明される。第一章「スペイン市民戦争と現代」では、内戦の歴史的経緯が簡潔に叙述され、第二章「今日のスペインに見る市民戦争」では、現代スペインにおける「市民戦争」の意味を現地におけるルポという形で追っている。また、第三章「スペイン市民戦争とアジア」では、「市民戦争」と当時のアジア(中国、朝鮮、フィリピン、インド、ベトナム)と

の関係、とりわけそれに参加した人びとの相貌を簡潔明瞭に記している。第四章「スペイン市民戦争と日本」では、「日本と「市民戦争」」との関わりを、第二章同様に現地ルポという形で追っている。エピローグ「内戦を越えて」では、現代的意義として「市民戦争」における市民の主体性が着目され、今後の日本のあり方を考える際の重要な視点として喚起されている。

本書の特長は、研究者とジャーナリストによる二つの異なる立場並びに視点を織り交ぜることによって、「市民戦争」の意義を過去と現在という二つの視点から捉え直した点にある。また、新書という形式に如実に現れているように、本書は一般読者を想定して、歴史事項に関するコラムやたぐさんの写真を駆使して、たいへんにわかりやすい叙述になっている。しかも、歴史的経緯や政治学用語の丁寧な説明並びに現地ルポという形での親しみやすさなど、一般書としての工夫が随所になされている。その意味で、新書としてとても読みやすい内容になっているといえる。構成も現代的な問題意識や状況から、過去に遡り、考察するという形式になっており、この点もまたわかりやすさの要因となっている。

従来、「市民戦争」は「内戦」といわれてきたように、市民という視点は、比較的希薄であり、むしろ過小評価されてき

た。それに対して本書は、市民という視点から敢えて「市民戦争」と表記し、これを再検討かつ再解釈しており、この点は、きわめて興味深い視点であるといえる。

また、本書は、アジアという視点から「市民戦争」を再検討しており、特にここでは、参戦したアジア諸国の人びとの相貌の一端が明らかにされており、この点も、類書にはない新しい点であるといえよう。

以上の意味で、本書は、研究者とジャーナリストのそれぞれの長所を引き出しかつ短所をお互い補い合う効果を挙げている。両者の良きコラボレーションといった内容に仕上がっている。しかも本書が、新書という形での一般書として出版されることは、二〇〇六年で七〇周年を迎える「市民戦争」の現代的意義を市民に喚起する上でも興味深い企画であるといえる。

以上が、本書を一般書として評価した場合のコメントであるが、以下では、研究という観点からみた場合のコメントを若干述べてみたい。

まず、第三章の叙述である。ここでは、「市民戦争」に参加したアジアの人びとの相貌が客観的に記されているが、その叙述の仕方が、基本的に生年月日と簡単な略歴ないしはエピソードに留まっており、叙述にもう少し工夫が欲しいところ

であった。

次に第二章及び第四章の聞き取りについてである。これらはいわゆるオーラルヒストリーであり、学問的に様々な手順と手続を必要とするものである。聞き取りで語られている内容を当事者の記憶の問題として捉えるのか、それとも一つの史実として捉えるのかによって、聞き取りの位置づけが必ずと異なってくる。その区別は本書では必ずしも明確ではなく、むしろその解釈は読者に委ねられている。記憶と歴史の問題は政治学及び歴史学において難しい方法論上の問題を提起しており、この点の区別並びにフォーローが今後、研究としては必要となってくるであろう。もともと本書は一般書であり、以上の点はないものねだりに過ぎないが、今後の展開に対する評者の期待として受け止めてもらえれば幸いである。

最後に、「市民戦争」勃発七〇周年を迎え、本書の問題提起を踏まえた上での、アジア及び市民からの視点による同事件のさらなる問い直しに望まれる。

(熊野直樹)